

藝術研究所 研究調査報告書

6

2007

大阪芸術大学藝術研究所

ご 挨拶

大阪芸術大学藝術研究所

所長 山縣 熙

『研究成果報告』第6号をお届けいたします。

この報告書は、平成18年度の公募の中より藝術研究所運営委員会
が認めた補助費による研究調査の成果をまとめたものです。

本学に於ける研究調査活動が、より活性化することを願い、来年度
以降も研究調査補助の活動を継続してまいります。特に総合芸術大学
の特性を生かした、領域を超えた共同研究調査は、大いに歓迎いたし
ます。

またこの報告書に対する批評・感想などお気づきになった点は当研
究所宛にご連絡下さい。

藝術研究所研究調査完結研究課題一覧表

(平成 18 年)

| 研究ディレクター | 研 究 課 題 | 頁 数 |
|----------|---|-----|
| 井 関 和 代 | 中央アフリカ、民族芸術と環境のミュージアム | 5 |
| 太 田 米 男 | 玩具映画及び映画復元・調査・研究プロジェクト4 映画保存と活用に関して1 (時代映画を中心に) | 8 |
| 服 部 明 世 | 芸術活動の心身におよぼす効果に関する研究 | 10 |
| 山 縣 熙 | 終戦直後の〈カストリ雑誌〉の総合的研究 | 16 |

※各氏名の肩書きは、研究調査補助費申請書申請時の役職で掲載しています。

中央アフリカ、民族芸術と環境のミュージアム

研究年度・期間：平成18年度

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 教授)

共同研究者：狩野 忠正
(環境デザイン学科 教授)

若生 謙二
(環境デザイン学科 教授)

下休場千秋
(環境デザイン学科 助教授)

月溪 恒子
(音楽学科 教授)

学外共同研究者：上羽 陽子
(通信教育部 非常勤講師)

伊藤 幸司
(工芸学科 非常勤講師)

亀井 哲也
(民族博物館リトルワールド
主任研究員)

研究補助者：平金 有一
(博物館 館長・工芸学科 教授)

○研究の概要

本研究の目的は、中央アフリカを研究対象地とする研究者が中心となって、その地域の民族芸術の特質を明らかにし自然環境との関連性を考察するとともに、それらの研究成果を、学生を始めとする一般の人びとに分かりやすく伝えるための展示方法や内容を提案することにあつた。

研究の概要としては、研究会（8回）、シンポジウム（1回）、製鉄の再現実験（3回）、展示会（1回）を実施した。

○研究会の内容

研究会の実施内容は、以下の通りである。

- 4月4日 第1回研究会：研究計画の確認及び、展示内容とスケジュールの決定
- 5月8日 第2回研究会：展示会の打合せ、シンポジウムの内容検討
- 5月23日 第3回研究会：展示計画、会場構成の検討
- 5月25日 第4回研究会：展示会場の下見と会場レイアウトの決定
- 6月19日 第5回研究会：展示会のポスターと映像資料の検討
- 7月13日 第6回研究会：展示パネル内容、陳列プランの検討
- 10月4日 第7回研究会：展示会の反省会
- 11月30日 第8回研究会：研究の総括

○研究発表1 シンポジウム「民族芸術と環境のミュージアム」

本シンポジウムは、大阪芸術大学芸術研究所第39回教員研究発表会及び、民族芸術学会第101回研究例会として、6月24日に大阪市立東洋陶磁美術館地下講堂において開催した。

「民族芸術と環境のミュージアム」をテーマとするこのシンポジウムには、研究者、学生を始めとする32名が参加した。内容は、井関和代（大阪芸術大学）が司会をし、亀井哲也

(野外民族博物館リトルワールド)、川口幸也(国立民族学博物館)、若生謙二、下休場千秋(以上、大阪芸術大学)の4名の演者が研究成果を発表し、その後、討論を行った。

亀井哲也は「環境とミュージアム、リトルワールドを事例に」をテーマとして、装飾文化としての壁絵をもつ「南アフリカ インデベレの家」を取り上げ、人間が作る最大の「道具」である住まいの展示が、人間の暮らしと自然とのエコロジカルな関係を紹介するために有効であることを説明した。また、野外展示における環境との関連性について、豊かな自然の中で、季節や天気で変化する野外空間において“リアル”な体感が可能となる反面、現地の気候、植生などとの違いや、家屋の傷みと修復、保全管理の必要性について指摘をした。

下休場千秋は「環境とミュージアム、バフツ博物館を事例に」をテーマに、中央アフリカ、カメルーン共和国北西州において500年程の歴史があるバフツ王国の王宮で、毎年12月に行われる王国最大の年中行事「アビンフォ祭り」において観察できる音楽、楽器、衣装をはじめとする多様な民族芸術と、また、王宮の背後にある聖なる森や多数の建物と壁によって複雑に区分された王宮内の空間を紹介し、それぞれの意味づけと、様々な儀礼祭祀が行われていることを示した。さらに、王宮博物館の設置や、カメルーン政府による王宮のユネスコ世界遺産登録の動きについても述べた。

若生謙二は、自身がこれまで関わってきた大阪市立天王寺動物園における野外展示の事例について発表し、上記二名の発表に対してコメントを述べた。そのなかで、展示はメッセージ性が重要であり、動物園の野外展示では、人間と動物との関係を見直し、動物の生息環境を再現する生態展示という最新の展示手法が実現されていることを紹介した。

川口幸也は、英語で展示を意味する言葉displayと、軍隊を動員する意味のdeployとが、共に重ねてあるものを広げるというラテン語のdisplicareを語源とすることを指摘した上で、展示とは、力を見せつけ、存在を誇示するということの意味しており、客観的な内容の展示はあり得ないことを強調した。

後半の討論会では、司会兼研究ディレクターの井関和代を中心に、9月に開催予定の企画展『中央アフリカ、民族芸術と環境』を前提とした意見交換が行われた。特に音楽のような無形遺産の展示方法、風土のような地域の固有性の展示のあり方、近代ヨーロッパが生み出した博物館、美術館におけるアフリカ展示のあり方などについて、活発な質疑応答がなされた。

○製鉄の再現実験

製鉄の再現実験は、以下の通りに実施した。

8月20日～21日 第1回再現実験：製鉄炉の設置、製鉄作業

9月9日 第2回再現実験：製鉄作業の一般公開

9月16日 第3回再現実験：製鉄作業、鍛冶作業、製鉄炉の撤去

アフリカ、バンツウ系の人びとの製鉄作業の再現実験は、井関和代と伊藤幸司（大阪芸術大学非常勤講師）の指導のもと、「きのくに子どもの村学園」の中学生（10数名）の参加を得て、大学キャンパス内15号館横の傾斜地に設置した製鉄炉において行った。これまでの現地によって得られた情報をもとにして、鉄鉱石を焼成し半鉄品（ブルーム）を抽出する作業を実施した。3回にわたる再現実験には多くの見学者も訪れ、19世紀後半にその多くが消滅したアフリカにおける製鉄作業に高い関心が示された。アフリカの民族芸術と環境への関心を高める展示方法を検討するという本研究の目的の一つは、この再現実験によって、参加体験型の展示方法の有効性を再確認することにより達成することができたと考える。

○研究発表2 展示会「中央アフリカ 民族芸術と環境」

この展示会は、休館日の9月10日（日）を除く9月4日（月）から9月13日（水）の九日間、大学情報センター展示ホールで開催された。

本研究の主要な目的は、中央アフリカにおける人びとの暮らし、特に民族芸術と環境との関わりについて、多くの人びとに興味をもち理解を深めてもらうための効果的な方法を、実際に展示会を開催して考察することであった。そのため具体的には、「アフリカの染めと織り」、「アフリカの住居と環境」を展示テーマとして、カメルーンを中心に、ガボン、ナイジェリアなどの周辺各国の「王国文化」に焦点を当て、染織・衣裳品・装飾品（約100点）、織機（2点）、生活用具（約20点）、楽器（12点）、製鉄資料（約20点）などを展示し、会場内における木綿織機の体験、アフリカ太鼓の演奏、ギャラリートークを実施した。また、ポスター、チラシの作成・配布などの広報も行った。

会期中の全入場者数は、1,136名（内、学外は230名）に達し、アンケート結果等によると、多くの来場者にとってこの展示会は、これまであまり知らなかったアフリカの民族芸術や環境について、興味を持ち理解を深める機会になったことが明らかとなった。

○おわりに

以上のように、シンポジウム、製鉄の再現実験、展示会を実施することにより、アフリカの民族文化と環境について理解を深めるという本研究の当初の目的は、ほぼ達成できたと考えるが、そのためには多くの関係者の協力が必要であった。それらの方々に対して、ここに改めて謝意を表します。

研究メンバー一同は、これからも機会があれば、アフリカの民族文化と環境に関する調査研究と情報提供を続けてゆきたいと考えている。

玩具映画および映画復元・調査・研究プロジェクト4（通称：玩具映画プロジェクト4）

映画保存と活用に関して1（時代劇映画を中心に）

研究年度・期間：平成18年度

研究ディレクター：太田 米男
(映像学科 教授)

共同研究者：中島 貞夫
(映像学科 教授)

学外共同研究者：松本 夏樹
(芸術計画学科 非常勤講師)

石原 香絵
(NPO法人映画保存協会
副代表)

豊原 正智
(芸術計画学科 教授)

宮島 正弘
(映像学科 非常勤講師)

森脇 清隆
(京都府京都文化博物館
文芸1課 学芸員主任)

犬伏 雅一
(芸術計画学科 助教授)

小山 帥人
(映像学科 非常勤講師)

藤岡 幹嗣

吉川 幸夫
(映像学科 助教授)

安井 喜雄
(プラネット映画資料
図書館代表)

須佐見 成
(株式会社IMAGICAウエスト
フィルム事業部 部長)

上倉 庸敬
(大阪大学文学部 教授)

ジョアン・R・バナデイ
(ロチェスター大学
Japanese & Film 准教授)

継続研究である今年のテーマは、これまで収集した玩具映画フィルムをデジタル化して、広く映像を活用して頂くことを優先課題とした。収集本数も多くなり、それらのオリジナル・フィルム（数は限られている）と複製ネガ原版的保存、複製プリント（映写用フィルム）の活用が重要で、今回は時代劇映画に絞って、ビデオ（デジタル）化することを優先して作業を行なった。これまで、消滅しようとしている映画から複製ネガを作成し、映像の延命を図ることを目的としてきたが、450本（玩具映画以外のフィルムも含む）をフィルムで上映するには、まだ環境整備も出来ていない状態で、なかなか見て頂く機会がなかった。そこで、本年度は、まず時代劇映画の複製フィルムからテレシネ（ビデオ化）して、データ化し、その映像をDVDなどにして活用して頂くことを第一の目的とした。先日（2006年11月～12月）に開催された本学博物館主催の「おもちゃ映画と蓄音機」展では、ビデオ・プロジェクターでの上映と、コンピューター上での検索システムで、時代劇の玩具映画コレクションのすべてを見て頂けるようになった。まずは、最小限の約束を果たしたことになる。

今年度は、新たなフィルムの収集には目立った成果が得られなかったが、それには理由があって、すでに加水分解（ビネガー・シンドローム）というフィルム素材が溶け出した状態で、映写機にもテレシネ機にも通らないという消滅寸前の劣化した16mmフィルムが寄せられた。この映画が戦中に製作され、当時の特撮技術を結集し、軍事的な意味でも重要な映画「海軍爆撃隊」（1940年、東宝映画、木村莊十二監督）であることが判った。この映画は、海軍省後援監修による国策映画で、航空教育映画製作所という軍事教育を専門に製作した東宝の特別班が主体になって製作したため、終戦直後、GHQによる戦犯追及を恐れ、他の機密文書や国策フィルムなどと共に、焼却廃棄され、現存しない歴史上だけのまぼろしの映画であった。だから、映画会社はもちろん、国立フィルムセンター（アメリカからの返還フィルム）にもなく、寄せられた16mmが、この世に現存する唯一のものであることが判った。特に、この映画が「ゴジラ」などで有名な円谷英二の初の特撮監督作品であり、話題性もあった。監督は、この映

画の後、満州へ渡り、映画学校の設立に尽力した木村莊十二、原作・脚本は「マダムと女房」の北村小松、撮影は「広島・長崎の原爆記録」を撮影した三木茂、音楽は「羅生門」や「七人の侍」の早坂文雄という超豪華なスタッフ陣で、東宝の航空戦争映画の第1作であり、何よりも円谷の特撮監督第1作という記念すべき映画であることで、最優先して修復、復元を行うことにした。しかし、1本の映画の復元の費用は100本の玩具映画に匹敵するため、もちろん、当プロジェクト独自では復元できない。そこで、映画「海軍爆撃隊」復元委員会を立ち上げ、国立フィルムセンターや京都映画祭の助成を得て、本プロジェクトが主体になって復元することになった。従来の復元方法では、この溶けたフィルムからは復元できず、仕方なく16mmのままの複製ネガを作成し、プロアアップして35mmプリントを作るようになった。消滅寸前の状態で、辛うじて復元に間に合うことが出来た。復元版完成披露は、第5回京都映画祭（10月）で行い、テレビや新聞で報道され、反響もあって、大きな成果を得ることができた。「海軍爆撃隊」のプリントの1本は、本学のコレクションに加える事になった。

映画の復元や保存に関して、海外では映画修復や復元を教える大学もあり活発に行われているが、わが国には学校も講座もない。現在のところ、映画の復元を学ぶには外国へ行く以外に方法はない。また、大阪のIMAGICAウエストが日本で唯一の映画復元専門ラボとなった状況もあり、そこで、映画復元の専門家を育成することが緊急の課題と認識し、当プロジェクトが主体となって「映画の復元と保存に関するワークショップ」を提案した。賛同者もあり、京都府京都文化博物館、プラネット映画資料図書館、IMAGICAウエスト、当プロジェクトが主催し、京都映画祭関連事業として開催できた。本学の学生たちだけでなく、広く門戸を開き、参加者を募ったところ、国立フィルムセンターだけでなく、フィルム会社や現像所、デジタル復元の専門家、日本映画撮影監督協会、日本映画テレビ技術協会、NPO京都映画倶楽部、NPO映画保存協会などの協力を得て、9月2日－15日（2週間）のワークショップを行うことができた。参加者の意識も高く、充実したものになり、毎年継続して開催して行く賛同も得られた。

先述したように、デジタルでの活用は、本学博物館主催の「おもちゃ映画と蓄音機」展での成果もあり、次年度は、国産動画を中心にしたデジタル活用を計画している。玩具映画はすべてサイレント映画であり、上映する上で、音楽伴奏などのイベント性も考える時期にきており、活弁と伴奏など、次の課題も分かってきた。まだまだ、内外へのアピールも弱く、フィルムを収集するにも、当プロジェクトの内容を発信する必要もあり、学外の専門機関とも協力しながら、このプロジェクトを進めて行きたいと考えている。

尚、この4月に東京国立近代美術館フィルムセンターにおいて、「国際フィルム・アーカイブ連盟（FIAPF）東京会議2007」が開催され、玩具映画の紹介を依頼されて、発表する機会を得た。これもひとつの成果である。

芸術活動の心身におよぼす効果に関する研究

研究年度・期間：平成18年度

研究ディレクター：服部 明世
(環境デザイン学科 教授)

共同研究者：壺井 勘也
(環境デザイン学科 教授)

野田 燎
(教養課程 教授)

末延 國康
(教養課程 非常勤講師)

柿沼 祐太
(環境デザイン学科 助教授)

堤中 知子
(芸術研究科 嘱託助手)

はじめに

芸術は昨今のストレス社会において、癒しとして捉えられることが多くなっているが、芸術活動に着目した芸術療法に関しては、未だ十分に確立されていない状況にある。また、芸術療法に関する研究も医学、心理学からの個別的アプローチがほとんどであり、芸術学からのアプローチはほとんど例を見ない。そこでいろいろな芸術活動の心身に及ぼす効果について、総合芸術大学における各芸術分野の協働によって総合的に研究しようとするものである。

本研究では、まず芸術活動として音楽、絵画、園芸の三分野の活動による調査を行った。本年は、調査に際して被験者が具体的にどのような活動をするかの試行、履行と確定をした。

次に心身に及ぼす効果については、人間が上記三分野の芸術活動を履行する事によって現れる定性的、定量的な変化を客観的、科学的に説明しようとするものである。本年は、活動の影響、効果が現れ易い高齢者を被験者としたため、活動中の反応、活動の成果から定性的な変化の観察を主とした。

音楽、絵画、園芸の三分野の活動に関する調査の概要は次の通りである。

実施場所：特別養護老人ホームけま喜楽苑（音楽）及び芦屋喜楽苑（音楽・園芸・絵画）

対象被験者：特別養護老人ホーム入居者（音楽・園芸・絵画）及びデイサービス対象者（音楽） 3～9名

I. 音楽療法

実施期間：2006年8月19日～2007年2月12日

形態：音楽運動療法では唱歌、童謡から昭和の時代に流行った曲を中心に選曲し、流行歌、演歌等を参加者と共に歌う方法で実施。時に、フルート、サクソによるジャズ、唱歌、童謡、軍歌、流行歌を主にマンツーマン方式と多人数へのコンサート方式の両方実施。また、数回は歌、ピアノ、フルート、サクソ・アンサンブルの器楽合奏形態でクラシックから演歌プログラムで演奏実施。

A：芦屋喜楽苑における療法

調査方法：Mini-Mental State および改訂長谷川式簡易知能評価スケール

結果1：芦屋喜楽苑の被験者3名をMMS（30点満点）によって評価した。

被験者A：A.F. 89歳 女性 小脳変性症および認知症

2006年8月21日5点、変動0点から4点あり、2007年2月8日5点。

身体状態の良否による日内変動及び質問者の対応が評価事項に大きく影響を与えるため、実点数が変動した。

被験者B：T.F. 77歳 女性 脊椎症およびパーキンソン病を伴う認知症

2006年9月25日13点変動値-1から+4点 2007年2月8日16点。

本人の言葉で療法後、背中がとても楽になり気持ち良いと話される。

被験者C：K.B. 88歳 女性 アルツハイマー型認知症

2006年9月25日7点変動値-1から+8点 2007年2月8日15点。

日によって感情の高ぶりや感情失禁が出たため聞き取りが不可能なときがあり、検査に怒りだす場面が見られた。検査者は特養老人ホーム職員が担当した。

考察：MMS検査方法は言語理解を中心にしており、質問事項は健常者がはじめて認知症か否かの判断をする内容のため、すでに重度の認知症患者のレベルを見るには質問項目が難しすぎる。しかし、それでも点数が上昇していることから音楽と運動の身体への影響は良い作用がある事が分かった。また、臨床の見地から普段は食事や歩行が出来ないにも関わらず、療法後、紅茶やプリン、ケーキを食べたり、少しだが歩けたりしたため、評価方式はどうあれ認知症患者の健康維持と進行を抑える働きがある事が分かった。

B：けま喜楽苑における療法

療法実施回数は2006年8月19日、9月16日、10月21日と2007年2月12日の計4回実施。いずれもコンサート方式で多くの被験者が音楽を聴く形態で実施。デイサービスも含め9月16日に第一回の検査を実施。第2回目2007年2月12日、入所者から被験者6名を選び、改訂長谷川式簡易知能評価スケール（30点満点）によって評価した。

結果2：

Y.N. 82歳 女性 2006年9月16日0点 2007年2月12日3点

H.Y. 79歳 女性 2006年9月16日1点 2007年2月12日2点

M.N. 61歳 女性 2006年9月16日2点 2007年2月12日2点

E.N. 76歳 女性 2006年9月16日0点 2007年2月12日1点

M.I. 89歳 女性 2006年9月16日0点 2007年2月12日0点

T.T. 94歳 女性 2006年9月16日0点 2007年2月12日0点

考察：上から3番の被験者までの得点項目は3つの言葉を復唱する質問である。すなわち聞いた言葉のリピートが正確に発音可能になった。3番目は9月16日の時点では他の項目に点数があり、2月12日の時に反復問題に答えられた。この結果から解釈すると音楽演奏を聴いた後は聴き、判断する能力が高まり、発音が正確にできる傾向があると解釈できる。すなわち、音楽

鑑賞は言葉の理解と発音の聞き分け、発声機能の活性を促し、且つ、記憶能力も高める可能性が考えられる。今後、対象者を拡大し、より科学的で正確なデータを得られる検査方法によって解明する必要がある。

総結論：ピアノ伴奏により懐メロを歌う事やタンバリン、カスタネットでリズムを取り、手拍子で歌う事は決して悪い事ではない。しかし、名曲を音楽的レベルの高い演奏で聴く事は理解出来る、出来ないを超えて、日常の音楽以上に情動の深いところに作用し、身体に揺さぶりをかける。また、身体への運動感覚刺激が加わるとより身体機能の改善回復が見られるため、他の芸術活動が協力できる体制を設定すれば成果が上がると推察される。すなわち、芸術による感動を体験する事が最も重要であり、そこに脳全体の機能活性を促す力があるといえる。

Ⅱ．園芸療法

実施期間：2006年11月27日～12月18日

形態：園芸活動療法は被験者として、特別養護老人ホームに入居している認知症の患者の中から、毎回参加のできる5名を選出し、1つのグループとして、プランターに草花を植え込ませる作業を屋内で1時間から1時間半程度実施した。

被験者は独立歩行できる者、車椅子の利用者、身体の不自由な者などであり、その身体的状況を考慮して作業台の高さをその都度調整し対処した。被験者は数種類のポット苗から花の色、形、大きさ等を自由に選択し、土入れ・植え付け・水やりまでの行程を、支援者のサポートを受けつつ自主的に行った。完成したプランターは毎回各自の居室か食堂のベランダに設置し、日頃も草花にふれあうことができるように配慮した。

考察：被験者の反応、成果については、毎回の記録ビデオとデジタルカメラによる経過観察、並びに各被験者を観察した施設担当職員の報告をもとに分析を行った。被験者の中には水やりや眺めるだけの者もあり、また高齢者が多かったため、体調不良や施設の入浴などの都合により毎回作業ができない場合もあったが、ほとんどの被験者は普段自由の利かない者も身体を動かすなど積極的に作業をする様子を伺うことはできた。映像の記録では客観的な評価スケールを定めることはできなかったが、施設担当職員の報告には、園芸作業中の被験者らは日頃の様子と比較しても言葉数が増え表情が明るくなるなどの良い変化が見られた。さらに、軽度の認知症でADL(日常生活動作)レベルの高い者にとっては、作業を行う中での椅子に座ったり立ったりする行為の繰り返しやプランターに土を入れる作業によって、身体機能のみならず記憶機能の改善が見られた。前回の作業の内容や支援者の顔が記憶として残るようになり、3回目あたりから「次に何をおこなうべきか」ということが分かるようになって、作業行為そのものがスムーズになった。

総結論：園芸作業では自立程度の高い人が途中不参加となり、芸術活動に対して興味がある者のみが参加するという結果になったが、園芸作業を行う事によって記憶機能や身体機能の改善される可能性が見られた。また、「手の震え」を持つ者が作業中プランターへの土入れや花

苗の植え付けに熱中するあまり「手の震え」がなくなるという例もあり、リハビリ効果も期待できるものと思われる。園芸活動の運動感覚刺激により機能の改善が見られ、他の音楽療法や絵画療法と組み合わせ、またそれをより円滑に行うことで、いっそうの成果を上げることが可能であろうと考えられる。

Ⅲ．絵画療法

実施期間：2006年2月5日～3月5日

形態：絵画療法は被験者として、特別養護老人ホームに入居している認知症の患者数名を選出し、支援者とマンツーマンで1時間から1時間半程度の実技を計4回実施した。被験者は独立歩行できる者3名、車いすの利用者2名で、支援者は毎回同じ被験者に当たるように心がけた。これは信頼関係を築く上でも効果的であった。また座る位置は、前半の2回は横に座り、手を添えたり、耳元で話しかけたりしながら被験者と一体となって活動し、3回目からは対面に座り、顔を見て、眼を直視することによって色や形の認識確認をしながら進めていった。この方法により少しずつ自主的に取り組む方向へ導くことができた。導入として、季節や行事、着ている服などの中から主に色や形に関することを全体に5～10分程度話をし、その後支援者が個々に話をつなぎ、個人対応していく形をとった。

第1回目（クレパス、水彩絵具）

支援者が花・乗物・動物・人物・建物などのイラストを見せて話をする。全く反応を示さず、かたくなに描こうとしない被験者もいた。30分位すると効果が出始め、少しずつ興味を示すようになってきた。クレパス24色を見て好きな色を指で示したり、手で取ったりし、画用紙に自由な線で描くというよりもなせるという感じ。筆圧も弱く、プリントを見て描くなどはとても出来ない。その後水彩絵具で彩色する。

第2回目（クレパス、色紙〔トータルカラー〕）

色紙を見て好きな色を選び、ちぎったり、はさみで切ったり、もんでやわらかくしてちぎった色紙の紙片をのりで画用紙に貼っていく。支援者は色の選択やのり付けの手助けをする。色彩の決定は色と感情の認識度が確立されていないと指示されにくいもので、少しずつ積極的になってきた。全員が活動し、傍観者はいない。その上からクレパスで自由に描く。

第3回目（水性カラーペン、色紙〔トータルカラー〕）

水性カラーペンで自由な直線、曲線などを引き、その出来たマス目の空間に色紙をちぎって貼る。前回の色紙をちぎる行為が活かされ、ちぎった色紙の形に、チップ状の物から線的な長い物、丸、三角の固まりとしてとらえるなど、いろいろな類型が作られた。自由な表現にしたが、人物や花などを描く者もいた。

第4回目（水彩絵具、クレパス、色鉛筆、色紙〔トータルカラー〕）

会場に今までの作品を個人別に掲示し、導入で各自の取り組みを再認識させ、他者の作品と

比較することで、自己認識をより高めるようにする。今回は意志の疎通が確立されつつあり、第1回目に試みたプリントを見て描くという活動をした。クレパスで線表現をし、その上から各自思い思いの方法で自由に表現する。

考察：造形的な物を描くと、技術面での評価が意欲への支障になっていると考え、自由な色、自由な表現にしたのは効果的であった。また毎回主な材料を変えたことも興味を持続させるのに有効であった。色彩から受ける刺激は興味と意欲へつながっていった。

総括論：回を重ねるにつれて、白い画用紙に線や形、色をうめていく行為に抵抗がうすらいでいくのが良く分かった。最後は見ても描くことができるようになったので、継続的な活動がより効果的かもしれない。初めは無表情で心を閉ざしていた被験者たちも手でおどけたり、舌を出したりして表情が豊かになった。興味、関心、意欲の持続は身体にも表れ、手の震えが止まるなど良い影響を及ぼした。また、意識が他者に向けられることによって、思考範囲が広く、深くなったように見受けられた。今後は障害者や幼児など、いろんな立場の人たちにも実施し、総合的に効果を見ることが大切である。

IV. まとめ

園芸、絵画共通被験者で個性が顕著だった例として、園芸に第2回目のみ参加したKさんは、消極的だった園芸とは異なり絵画では自発性が見られ、ペン、トータルカラー、クレパスなど種々材料などを用いて積極性が表わされた。トータルカラーではスタッフがなぞった形にはさみで切り、のりを使用して貼り付けるなどその積極的な自発性に驚かされる面があった。また、「これは塗った方がいいかいなー」など自発的な発言も認められた。Kさんに関しては、園芸1回、絵画2回の参加であったが、園芸では土に触れることもなくただ「見ているだけ」であったものが、絵画ではある程度の自発性が見られたことから、芸能活動が個別的な範囲でも効果を発揮することが伺えた。軽度の認知証でADLレベルの高い者に対しては園芸のように「プランターに植える」という行為が継続する場合は、植える花苗は異なっても行為そのものは同じことの繰り返しであり、行為そのものが単調で作業にある程度慣れてしまえば、機能回復、改善の効果が得られないのではないかと推測される。そのため、毎回作業内容を変化させた絵画療法のように、少し高度な作業が適するのではないかと考えられる。一方、車椅子利用者のように何らかの身体的不自由さを持つ者にとっては、園芸の「土を埋めていく」作業は、単調ながら「埋める」という行為に「遣り甲斐感」「達成感」を感じ、それが作業遂行の動機付けとなって、リハビリ効果を発揮すると考えられる。さらに園芸作業でも絵画作業でも熱中して行くと「手の震え」が見られなくなるという傾向があることも判明した。各種作業を組み合わせることで大きな効果が得られるものと期待できる。

音楽療法に関しては、音楽を聴いたりリズムを取ったりあるいは歌を歌うなどの音楽活動によって被験者の身体機能は改善回復し、記憶能力も高まる可能性の高いことが確認された。

各種の芸術活動を効果的に組み合わせることで芸術による感動体験を提供することにより、心身に

様々な良好な効果が与えることができるものと推察される。

おわりに

本年度は調査の初年度であり、具体的な調査方法、実施手法や協力施設、被験者の確定に予想外に手間取り、また、先進的な研究のため評価、分析の手法、スケールについても定まらなかった。結局本年度調査は、療法効果の面から接近する事とした。豊富な調査研究実績のある音楽活動、絵画活動は順調な調査を実施する事が出来た。一方園芸活動については、調査方法を研究しながら調査を進めなければならなかった点で、担当の研究者が苦労したところであるが、作業内容、材料、テーマなどに関して考える余地が有るものの、調査方法や実施手法について次年度以降の段階では音楽活動、絵画活動と歩調を合わせて作業を進める事が出来ると思われる。

今後は科学的なデータも加えて、芸能活動の心身におよぼす効果を検証、解明していく必要があると考えられる。高齢者の場合などは長谷川式や記銘式などの方法で評価が可能である。またその他にも、最近の生理的評価手法の開発、進歩により客観的、科学的に説明する事が相当程度可能になりつつあると言える。勿論、この種の調査研究に際してデータを蓄積する場合、被験者の了解を得る等被験者の名誉と尊厳の確保とともに、個人情報保護の面に最も慎重でなければならないと考えている。

以上のような今年度の調査研究の成果を基礎として、次年度に向けて更にデータの蓄積を重ね、本調査研究の目的に向けて成果を得る事ができるよう努力して行きたい。

終戦直後の〈カストリ雑誌〉の総合的研究

研究年度・期間：平成18年度

研究ディレクター：山 縣 熙
(文芸学科 教授)

共同研究者：松井 桂三
(デザイン学科 教授)

藪 亨
(教養課程 教授)

田中 敏雄
(教養課程 教授)

豊原 正智
(芸術計画学科 教授)

井関 和代
(工芸学科 教授)

月溪 恒子
(音楽学科 教授)

出口 逸平
(文芸学科 助教授)

第二次大戦後の飢えと混乱の時代には、「カストリ雑誌」と称された大衆娯楽雑誌が、出版の自由に乘じて巷に約千種類も出現し、大衆文化の新しい領域を開いている。これらの雑誌の特徴のひとつは、直接に性風俗を取り扱っているところにあり、著名なそしてまた後によく知られることになる文芸作家や挿絵画家も性風俗をモチーフにした本文や挿絵・漫画をしばしば掲載している。本研究は、こうした「カストリ雑誌」を、文芸、美術、デザイン、工芸、建築、映画、音楽などの多角的な視座から個別的に、また社会文化史的に調査研究するとともに、その芸術文化史的な意味を理論・批評・歴史等の視点から総合的に考察することを目的とする。また本共同研究は、本学大学院・芸術研究科・カリキュラムに〈プロジェクト研究〉研究課題として組み込まれ、教員・院生が一体となって研究するという新しい教育研究方法の試みであると共に、研究の経過ならびに成果を同時に学内外に向けて積極的に情報発信するものである。

本共同研究は3年計画からなっており、本年度はその2年度であった。そのために教員(8名)と大学院生(修士課程4名、博士課程2名)からなるプロジェクトチームが組織され、毎週金曜日5時限に研究会が開かれた。そして、次の三つの見地からカストリ雑誌の調査・研究を進めた。

1)、週間読物誌、風俗誌などにおける「カストリ雑誌」の在り様や、文芸誌、一般文化誌などと「カストリ雑誌」との関係を調査研究し、さらにはこれらに掲載された文芸作品や挿絵を調査研究し、占領下における芸術家たちの活動を考察した。

2)、音楽・舞踏・演劇・映画に関する雑誌群における「カストリ雑誌」の在り様について調査研究し、占領期の大衆文化の実相について考察を深めた。

3)、美術・工芸・建築・写真・デザインに関する専門雑誌群と「カストリ雑誌」との関係を調査研究し、占領期の美術とデザインの動向について考察を深めた。

その際上記いずれの場合にも、米国メリーランド大学所蔵「ブラング文庫雑誌コレクション」(1945～49年に日本で出版されたほぼ全ての雑誌を取録)マイクロ・フィッシュ版の「一般誌部門、芸術・言語・文学部門、小冊子分類70番」(本学図書館所蔵)と、初年度に購入したカストリ雑誌関係書誌(20冊)およびカストリ雑誌(411冊)の調査・研究を深めるとともに、さらにその周辺雑誌を含むカストリ雑誌(538冊)(添付図参照)と関連資料を調査し購入



アベック社 昭和24年12月



佐田書房 昭和23年4月



創世社 昭和24年



創文社 昭和24年12月



曙書房 昭和26年10月



蓬書房 昭和22年11月



くいーん編集部 昭和22年8月



大衆社 昭和24年11月



漫画書院 昭和22年4月